音楽室で、待ってる。

西秋　真衣夏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
音楽室で、待ってる。

【Ｎコード】
Ｎ０５３８Ｆ

【作者名】
西秋　真衣夏

【あらすじ】
音楽室からはピアノの音が響く。藍璃はある日音楽室のドアを開けた。なんとそこでピアノを弾いていたのは・・・

【第1話：ピアノの音】

それは、昼休みのことだった。
「そーいえば藍璃(あいり)ってさァ、・・・スキな人いるの？」
昼休みが始まって、一番最初に夏実(なつみ)が言った言葉がそれだった。藍璃はいきなり聞かれたので、少し反応が遅れた。
「え？い・・・いきなりなによ・・・？夏実？」
そして藍璃は顔を上げて、さっきまで予定帳を書いていた手を止める。
「だから・・・藍璃には、いないの？スキな人って。」
そう聞いた夏実は、藍璃から少し目をそらす。藍璃は予定帳をすぐに書き終え、ペンをおいた後に口を開いた。
「え・・・そ、そりゃぁ・・・いるよ。いるに決まってんじゃん。夏実にもスキな人いるんでしょ？教えてよー」
藍璃は、夏実にそう聞いた。逆に質問されて夏実は少し戸惑う。
「え・・・ウ・・・ウチもスキな人いるケドさ・・・まず、藍璃から教えてッ！」
と困ったように夏実が言うと、藍璃は少し笑って、
「んー・・・分かったよ。教える。・・・でも、誰にも言わないでよ？もし誰かに言ったら、夏実のスキな人もみんなに言っちゃうからねぇー！」
と言った。夏実はギクッとするが、「え？あぁ・・・うん。」とうなずく。藍璃は、
「・・・えっと、４組にいる咲斗(さきと)だよ。」
と、あっさり教えてしまった。夏実は少し驚き、
「え？マジで？以外なんだけどー！藍璃のことだから、拓武(たくむ)のことがスキなのかと思った！」
と言う。藍璃は夏実の言ったことがありえない、という顔をした。
「拓武ー？マジでアリエンティーなんだけど！うるさいじゃーん！」

「え？・・・まぁ、確かにそうだけど。・・・っていうか、咲斗に告白とかしないの？」
夏実はそう藍璃に言った。藍璃は少し赤くなった。予想通りの藍璃の反応を見て夏実は笑う。
「な・・・なに？笑わないでよ・・・！」
そう、藍璃が少し怒ったように言った。夏実は笑うのをやめず、からかうように夏実にこう言った。
「告白する勇気、ないんだぁ？」
ビクッとする藍璃。図星なのだ。
「なに？文句あんの？できるワケないでしょ！告白なんて・・・」
藍璃はこう言って、不機嫌そうに口をとがらせた。夏実は笑いをとめ、
「怒んないでよー！ゴメンってばぁー！」
そう言っていると。
「夏実ィー！今日、ウチらが図書室の当番だから行かなきゃでしょぉー？早くー！」
とクラスメイトの鈴が夏実を呼んだ。夏実はすっかり忘れていたらしく慌てて、
「ヤバイ！忘れてたー！ゴメン藍璃！そーゆーことだから、ウチ行くねー！」
と走り去っていってしまった。話し相手の夏実が行ってしまった。
藍璃はヒマになったので音楽室へ向かった。
藍璃は小さい頃からずっとピアノを習っていて、もう１０年にもなる。ピアノが大好きなのだ。ピアノは練習すればどんな曲だって弾(ひ)けるし、弾けるととても楽しいから。
そう考えた藍璃の音楽室に向かう足が速くなっていた。はやく、ピアノを弾きたい！角を曲がる。壁の掲示板には、掲示委員会が作った画用紙の貼り絵が飾ってあった。また角を曲がると、音楽室前の廊下に来た。すると。
急に藍璃の足が止まった。音がする。また今日もピアノの音が、す

る。
藍璃よりも先に誰かがピアノを弾いていた。

～また、今日も。～

藍璃が音楽室に来ると、いつも誰かがピアノを使っていた。誰が弾いているのか見てみたかったが、知らないセンパイだったりしたらなんかイヤなのでいつもあきらめて帰っていた。
でも、今日は。見ようと思った。誰が弾いているんだろう？藍璃は少し勇気を出して、音楽室のドアに近付いた。そしてドキドキしながら、誰が弾いているのか見てみた。その瞬間。え？藍璃はとても驚いた。藍璃の口がポカーンと開く。どうして？・・・なんとピアノを弾いていたのは・・・同じクラスの男子・小野沢（おのざわ）連（れん）、だった。なんでアイツが弾いてるの？っていうか連ってピアノ弾けるの？予想外すぎるよ！だって今ピアノを弾いている連ってクラスで全然目立たないヤツなんだもん。ピアノが弾ける、なんて聞いたこともなかったし。
そう思いながら、藍璃はドアを開けた。ドアの開く音がしても、連はまだピアノを弾き続けていた。藍璃は静かに連に近づいた。連は目だけを動かして夏実を見た。だがすぐに連の目は、ピアノを弾いている自分の指先に戻った。
藍璃は連の弾く曲を聴いていた。この曲、あたしが今練習してる曲だ・・・
連の弾く曲を聴いていると、曲が終わった。藍璃はハッとして連が曲を弾き終えた後、話しかけた。
「連って、ピアノ弾けるんだぁー。知らなかったよ！」
連は話しかけられたのに驚き、藍璃を見つめた。だがすぐに目を逸らしピアノの鍵盤を見てしまい、その言葉にはなにも反応しなかった。無視かよ！と藍璃は少し口をとがらせた。つまらなくなって音楽室を出ようとすると。

「この曲、知ってる？」
連は、音楽室を出ようとする藍璃を引き止めるようにそう聞いた。
藍璃はさっきまで何も言わなかった連がイキナリ話しかけてきたので、驚いて足を止めた。連は藍璃をじっと見つめていた。藍璃はその目に引き戻されるように音楽室に戻った。なんか、不思議なカンジがした。
そういえば同じクラスなのに一度も話したことがないな、とその時藍璃は思った。
そして藍璃は連の近くへ行き、質問に自信満々に答えた。
「知ってるよ！ショパンの幻想即興曲の即興曲変イ長調でしょ！だってあたし、今練習してるんだよ！」
藍璃は目を輝かせた。藍璃は、とてもうれしかった。藍璃のようにピアノを弾ける子に会ったことがなかったから。それが、うれしかった。
「ねぇ！他になんか弾ける曲ってある？」
藍璃はわくわくして聞いた。すると連は何も言わず頷いてピアノに向かい合い、深呼吸をしてから静かに鍵盤へ指を運んだ。連ってあんまり話さないんだなぁと思っていると、流れる音。キレイに、言い表せないほどに流れる。・・・この曲は・・・藍璃が今度弾きたいなと思っていた曲だった。
「月光の第３楽章・・・だよね？」
そうピアノを弾いている連に藍璃は聞いた。すると連は演奏を続けているのに鍵盤から視線を離し、藍璃をまっすぐに見つめた。鍵盤から目を離したりして間違えないのかな、藍璃と思った。でも連は一音も間違えなかった。
少しして連は鍵盤に視線を戻し、
「そうだよ。藍璃も月光の第３楽章・・・弾ける？」
と藍璃に聞いた。　「藍璃」。　そう呼ばれて少しドキッとした。
「えっと、月光の第３楽章は、次に弾こうと思ってるんだ！だから・・・まだ弾けない。あ！第１楽章と第２楽章は弾けるけど・・・！」

と、藍璃は答えた。連はピアノを弾く手をとめた。連は藍璃の方へ体を向け、口を開いた。
「じゃあ藍璃・・・幻想即興曲、今やってんでしょ？ちょっと弾いてみてよ。」
また、名前を呼ばれてドキッとした。
「え・・・上手く弾けないよ？」
と藍璃は困ったように言った。連は頷いて、ピアノのイスを離れた。藍璃はそのイスに座り、深呼吸をしてから鍵盤に指をおいた。そしてその鍵盤を静かに押した。連と違ってはっきりとした強い音。最初は弱く。この音は、ペダルを使って・・・1オクターブ上からおりてくる。間違えずに弾くことができた。このまま、このまま・・・

しばらく藍璃の演奏を近くのイスに座って聴いていた連は、
「やっぱり上手いな・・・」
と言った。連はピアノを弾いている藍璃を、じっと見つめている。視線に気づいた藍璃は、少し緊張した。

やっとあと1ページ！ってくらいのところまで弾いた藍璃。そういえば手首が少し痛くなってきた・・・。あと、3小節くらい。静かに、最後の音を出すために、指で鍵盤を沈めた。鍵盤から指を離して、音を切る。膝に手を置くと・・・息が少し切れていた。疲れた。息を整えるために深呼吸をしていると連が立ち上がり、藍璃に少し近付いて言った。
「上手く弾けてるじゃん。」
そう、連は笑っていった。笑った連を見て、藍璃はまたドキッとした。
「そ・・・そうかな？連の方が上手かったよ・・・！」
藍璃は連から目を逸らした。連はクスッと笑って、
「月光の第3楽章、練習してみる？藍璃なら、できると思うんだけ

ど。」
弾きたい！藍璃はガタッと立ち上がった。勢いよく立ち上がったので、イスがガターンと音をたてて倒れた。でも連は、それに驚きもせず微笑んでいた。藍璃は目を輝かせて言った。
「弾きたいよッ！っていうか絶対弾く！」
連は微笑んだまま頷き、
「分かった。でも今日は楽譜持ってないし・・・。明日オレが楽譜もってくるから・・・明日から、練習しよう？」
と言われ、藍璃は大きく頷いた。そして自分がイスを倒していたことに気づいて、イスを元に戻した。そして連にそのイスに座らせた。
「な・・・何？」
連はイスに座って、少し不思議そうに藍璃に言った。夏実は何も言わず、近くのイスに座って連をじっと見つめた。藍璃はうれしそうに聞いた。
「連は子犬のワルツ、弾ける？」
そう聞かれて、連は小さく頷いた。「へーぇ」と藍璃は言った。
「弾いて。いいから・・・。連の、聴きたい。」
藍璃がそう言うと、連はまたなにも言わず頷いた。連は鍵盤へ指を置く前に、深呼吸をした。そして。右手が「ラ」の「♭」を押して。流れる。流れる。途中から左手がはいって・・・。連のピアノは、聴いていていているとその曲の場面がたくさん浮かんでくる。目を閉じると、ほら・・・子犬のワルツの場面。子犬が、走り回ってる。広い、広い、草原を。自分のシッポを追いかけて。まわる、まわる。くるくる、くるくる・・・。楽しい。楽しい！藍璃はいつの間にか微笑んでいた。連の、「演奏」がスキ。連の「ピアノ」が、大スキ・・・！
連は、鍵盤から目を離した。鍵盤から離れた連の目は・・・連の演奏を目を閉じて聴いていて、楽しそうに微笑む夏実の姿があった。連は、藍璃を見つめた。すると、胸の鼓動がはやくなった。

・・・・・・・

急にピアノの音が消えた。

「連？」

藍璃は閉じていた目を開けて、連を見つめる。連は鍵盤から指を離した。

「ど・・・どーしたの？いきなり・・・なんでやめちゃうの？まだ曲の途中でしょ？」

連は、何も答えない。そして、うつむいて・・・何も言わず、ただ静かに・・・

藍璃は口をとがらせた。イスにもたれかかって・・・。しばらくの間、２人は話しをなかった。

音楽室からは音がしなくなった。する音といったら、時計の音だけ。うるさいほどに響く時計の音。ずっと、その音だけ。

・・・次の瞬間。

２人は同じタイミングで顔を上げた。というか、おどろいて飛びあった。５時間目の予鈴の音だった。それでも連はまたうつむき、動くことはなかった。藍璃はため息をついた。そして立ち上がって、連の隣に立つ。

「・・・早く行かないと、５時間目始まるよ！行こっ！連！」

連がゆっくりと顔をあげると。

「ぅ・・・わッ・・・！」

藍璃が連の腕を引っ張った。連は引っ張られた勢いでよろけながら立ち上がった。そのまま藍璃は連の腕をぐいぐいと引っ張っていき、音楽室のドアを開け、早足で廊下を歩く。連は角を曲がるたびに「うわっ」と小さく叫んだ。

「じゃあ・・・明日から、昼休みに・・・音楽室で、待ってる。」

藍璃がそう言ったのは、教室のドアが見えた時だった。そして藍璃は急に連の腕を放した。連は腕を放され、大きくよろけた。よろけ

た連に気づきもせず、藍璃は教室に入った。連はよろけた方の足と反対の足でバランスをとって体勢を整える。そして連はゆっくりと教室に入った。
連は自分の席である、窓側の一番後ろの席に座った。まわりのクラスメイトは、それぞれの話に夢中で連に気づかなかった。
その後数学科担当の教師・野木が教室に入ってきたのと同時に、ザワザワとしていた教室が静まる。そしてチャイムが鳴った。
『明日から、昼休みに・・・音楽室で、待ってる。』
連は、藍璃がさっき言った言葉を思い出していた。そして、とてもうれしく思った。・・・音楽室で、待ってる・・・か。連の胸の鼓動がはやくなっている。それはさっき音楽室から走って教室に戻ってきたせいなのか、それとも・・・

連は開け放された教室の窓から空を見つめた。その窓からは心地よく、涼しい風が入ってきた。静かに、やさしく。

それは連の熱くなった頬を冷まそうとしているようだった。

【第2話：2人の昼休み】

「連(れん)！」

ピアノの音が聞こえる音楽室のドアを開けたとたん、この声がした。

「遅いじゃん！」

遅い？連は微笑む。遅いって言っても、まだ昼休みになって1、2分程しかたってない。よくこんなに早くこの音楽室にこれたな、と連は思った。

「連！楽譜、持ってきた？？」

藍璃(あいり)の輝いた瞳。それを見て連は少し嬉しくなった。連は手に持っていた楽譜を渡そうと思い、藍璃に近づいた。藍璃も連に近づいてきた。連が藍璃に楽譜を渡そうと腕を伸ばす。でも藍璃はその楽譜を受け取ろうとはせずに、連の後ろに回った。

「藍璃？」

驚いている連の背中を藍璃は押した。連は急に押され、少しよろけながら前へ進む。そのまま押されて、ピアノの前まで来る。そしてピアノのイスにドサッと座った。「？」と連が、立っている藍璃を見上げる。すると藍璃は笑って

「連、また弾いてよ！月光の第3楽章！！」

と言った。連はそんな嬉しそうに笑っている藍璃を見て、今までにない感情を持っているのに気づいた。どんな感情なのかは分からないが・・・胸の鼓動がはやくなった。

「・・・分かった。」

藍璃から少し目をそらし、ピアノに向き合って座る。連は鍵盤へ指を置く前に、深呼吸をする。そして広がる連のピアノの世界。すごい、すごい。連の音だ・・・。あたしには出せない、透き通った音。・・・途中で音が止まった。

「ここまでが1ページ。藍璃、練習してみて。」

連はそれだけ言うとピアノから離れた。

「・・・分かったー。やってみるね！」
藍璃も連と同じく、鍵盤へ指を置く前に深呼吸をした。楽譜を見ながらゆっくりと引き始める藍璃。でも、なかなか上手く弾けない。藍璃は少し弾いて鍵盤から手を放した。そしてしばらく楽譜を見つめる。
「・・・連～やっぱりむずかしぃーよぉー！！」
藍璃がそう言って口をとがらせる。その瞬間。・・・連が藍璃の後ろに来た。
「れ・・・連？！」
連は藍璃の後ろに来たかと思うと、藍璃の手に自分の手を重ねた。手を、重ねた・・・！？藍璃は驚ろく。驚ろいて・・・ドキドキした。ドキドキ、ドキドキ、胸の鼓動がはやまる。連に、この胸の鼓動が聞こえていないか心配になった。
「いきなり弾けるワケないじゃん。ちょっとオレが弾いてみるから・・・」
藍璃はドキッとして自分の手をあわてて引っ込め、ひざに置いた。すると連の腕が藍璃の顔の横から伸びる。そして連はピアノを弾きだした。やはり一音の狂いなく。藍璃は連の奏でる音を聞いて、さらにドキドキした。連の力強い手。やっぱり上手いピアノの音。全部が藍璃をドキドキさせた。
「その音は♯（シャープ）にしないと・・・指番号、気をつけて・・・」
連の声。胸の鼓動。流れるように動く指。だんだんと弾けるようになる。すごい、すごい・・・ッ！弾ける！
「連！弾けるよ、あたし・・・ありがとッ！！」
連はすこしピクリとする。そして藍璃の手から自分の手をはなす。
連は藍璃を見つめていた。真っすぐに、藍璃を。
藍璃のピアノの音が揺れた。音が、消える。
「うぅー・・・できないよー！やっぱりむずかしぃ！！」
藍璃が鍵盤から指をはなした。その時。
「あ・・・予鈴だ・・・」

5時間目の授業の予鈴がなった。藍璃は残念そうにピアノを閉め、楽譜を持って連に近づく。連は楽譜を受け取り、
「急ごう。」
それだけ言って藍璃の前を歩き出す。それに続いて藍璃も歩く。
「ってか歩いてたら間にあわないよッ！走ろう！！」
と藍璃が連を追い抜く。連はハッとして走り、藍璃の横に並んだ。
二人はそのまま走り続ける・・・勢いよく角を曲がって・・・

「・・・藍璃??」
勢いよく席に着き、息を切らしている藍璃を見て夏実は驚く。
「どこ行ってたの??もう授業始まるよ??・・・ってか大丈夫?」
藍璃はまだ息を整えている途中だ。
「だ・・・いじょうぶ・・・」
そして授業開始のチャイムが鳴り、先生が入ってくる。
「あのさ、藍璃・・・あとで話があるんだけど・・・」
夏実は早口でそう言った。藍璃は「え?」としか反応できず、戸惑っていると。
「起立！礼！」
授業が始まった。

『話があるんだけど・・・』
何の事か全く分からなかった。だが。藍璃はそんなに重要なことではないだろうと思い、そのことをあまり気にせずに授業を受ける。
・・・夏実は・・・目を伏せた。

【第3話：藍璃の好きな人】

「お前ら・・・来月テストなんだから勉強しろよ！中学1年だからって遊んでるなよ！」
そう社会科担当の野月が言って、授業が終了した。
「そっかぁー・・・来月テストかぁ・・・全然勉強してない！・・・・そーいや話って何？？？」
藍璃(あいり)はそう言った。
「あ・・・藍璃。話なんだけど・・・」
夏実(なつみ)が言いにくそうに話す。藍璃は夏実の表情を見て少しだけ真剣な顔になる。まわりのみんなは騒いでいる。その中で夏実が本当に申し訳なさそうな顔をして口を開く。
「あ・・・あのさ。藍璃のスキな人・・・咲斗(さきと)のことなんだけど・・・実は・・・」
藍璃は次の言葉を静かに待った。
「鈴(りん)に教えちゃったんだ・・・ゴメン・・・それで・・・」
「なーんだ。そんくらい別にいいよ。教えるなって言ったけど・・・鈴だけならいいよ、教えるの。ちゃんと口止めしといたんでしょ？」
藍璃は明るくそう言った。夏実は困った。『それで・・・』まだ、続きがあるのに。
「あの、それで・・・鈴が・・・」
と夏実が言いかけたとき。夏実の横に・・・鈴が来た。
「藍璃、ゴメン。本当にゴメン・・・これ聞いたら、絶対怒ると思うよ。」
そこで鈴は言葉を切り、また少しして
「・・・でも、お願い。聞いて・・・」
と言う。そして鈴の表情が険しくなる。藍璃は何の事か分からず、ただ首をかしげていた。鈴の険しかった表情が急に不安そうになった。

「じ、実は・・・咲斗に言っちゃったの。昼休みに。・・・廊下で会った時に・・・」
藍璃はそれでも何の事か分からなかった。
「藍璃が、あんたのことスキなんだって、って・・・言っちゃった。咲斗、本人に・・・」
藍璃はそう言われたが、最初は意味が分からなかった。本当に。【頭の中が真っ白になった。】という表現があるが、まさにそのとおりだった。何も言えなくなり、ただ夏実と鈴を見つめるしかできなかった。
・・・そんな。何で？夏実は鈴に教えたの、あたしのスキな人を？あたしの許可も得ずに？・・・それだけならまだ良かった。でも。鈴は何で平気で言っちゃうの？咲斗に。どうして・・・
そんな怒りや不満が頭の中をただ回っていた。
「ゴメン・・・あたし・・・つい言っちゃって・・・」
鈴と夏実が言うが、そんなの藍璃は聞いていなかった。
「ねぇ・・・なんで平気で言えるの？誰にも言わないでって言ったことを・・・なんで？それに鈴に限っては・・・よくそんなこと本人に言えるよね・・・意味分かんないし・・・」
藍璃は我慢しきれずについに口に出した。そう言われた夏実と鈴は唇をかみしめながら、また謝った。藍璃はどうすればいいのか分からなかった。「咲斗が、スキ。」そのことを咲斗本人に知られてしまった。どうしよう？
そんなの絶対・・・断(フラ)られるに決まってるよ・・・
藍璃は連(れん)を見た。連は静かに、本を読んでいる。まわりの男子がいくら騒いでいても、静かに文句言わずに本を読む。そんな連を見つめていると・・・いつのまにか・・・また、胸の鼓動がはやまっていた。

～あたし、咲斗のこと、本当にスキなのかな・・・？～

連を見つめていた藍璃の頭には、そんなことが頭に浮かんできた。
だって・・・
たった。たった30分程度の昼休みの間、いっしょにいただけなのに。連の声が、顔が、頭からはなれない。頭の中でぐるぐると連のことが回る。そのたびに、胸の鼓動がはやくなる・・・忘れられない。たった30分のことが。どうして・・・？

連と、目が合った。その瞬間。
体中が熱くなった。急いで連から目をはなす。連のことしか考えられないのは・・・それは・・・

―連が、スキだから。―

やっと分かった。あたしは、咲斗じゃなくて・・・連のことが、スキになってしまったんだ。
昨日、音楽室で会った瞬間から・・・

そのことにやっと気づいた藍璃は。
「夏実、鈴・・・もういいや。」
夏実と鈴にこう言った。急に言われた夏実と鈴は驚いて、困ったように「え？・・・でも・・・」などと呟く。そんな2人に藍璃は笑顔で、
「・・・もういいって！気にしなくてさ！」
とあっさり許した。夏実と鈴は少しだけホッとした表情になって、でもまた「本当にゴメンね・・・」と謝って席に戻った。
藍璃はこのあとどうすればいいのか迷った。
咲斗のところへ行って、「鈴の言ってたこと、ホントじゃないから！ゴメン！」と笑ってごまかし、忘れてもらうか。
それとも「前は咲斗のことスキだった。でも今は、他の人をスキになっちゃったから・・・ゴメンね」とホントのことを言うのか・・・

それとも、このまま何もしないでそのままにしておくか。そのうち、忘れてくれるかもしれないから・・・
いろいろと考えたが、今すぐにはどれも実行できそうもない。実行する勇気がない。だから、まだこのままで・・・少ししたら、どれかを実行しよう。そうするしか、ない・・・
藍璃は悩んだ末、そうすることに決めた。

「どーしよう・・・」
鈴が席について言い、そして誰かに話を聞かれていないか周りを確認する。夏実も鈴のそばに立ち、周りを確認する。良いことに周りの男子は廊下でふざけあっていて、ここにはいない。後ろには本を読んでいる連がいたが、連なら大丈夫だと安心して話を続ける夏実。
「鈴・・・ったく何で言っちゃうのよ・・・ハァ・・・」
夏実は鈴に文句を言った。
「だって・・・」
鈴は困った顔をして言葉を詰まらせた。
「フツー言わないでしょ！本人なんかに・・・信じらんない！藍璃の・・・」
藍璃。その名前を聞いて連はビクッと顔を上げた。
「藍璃のスキな人をそのスキな人本人に教えるなんて・・・」
スキな人・・・？連の目がゆれる。藍璃に、スキな人が？
「だって・・・つい言っちゃったんだもん・・・でも、咲斗、どっちかって言うと嬉しそうだったよ！もしかしたら、両思いかもよ？」
鈴は笑顔になる。連は・・・うつむく。咲斗？藍璃のスキな人って、咲斗のことか。咲斗、なのか・・・？
「そーゆー問題じゃないでしょ！もう！」
夏実はまた鈴に言うと、鈴はまた困った顔をした。
さっきまで本の文字を追っていた連の目は、本ではなく藍璃を見つめていた。・・・藍璃。そんな。

連は藍璃を見つめ続けた。だが藍璃は連を見ることはなく・・・

・・・６時間目開始のチャイムが、教室に鳴り響いた。

【第4話：2人と待ち合わせ】

授業が終わり、清掃時間になった。みんなが席を立ち、ざわめきだす。連(れん)は動かずただ席に座ったままうつむいていた。藍璃(あいり)が連の席の後ろにある掃除用具入れに向かって来る。藍璃は、連に何も話しかけずに通りすぎていった。連は、唇をかみ締めた。

『藍璃の好きな人は・・・咲斗(さきと)』

咲斗。藍璃がスキなのは咲斗。だから・・・

「なんでだよ・・・」

連はうつむく。頭には、藍璃が浮かんだ。

『音楽室で、待ってる。』

その言葉どおり、音楽室で待ってくれていた。・・・待っていてくれた。クラスで何も目立たないオレは、藍璃と話すことなんて一度もなかった。話しかける勇気がなかった。でも勇気がなかったオレは、ピアノのおかげで・・・音楽室のおかげで、藍璃と話すことができた。すごく・・・うれしかった。言葉に表せないほどに。

でも藍璃にはスキな人がいた。それを知ったとき、オレは・・・何もできずにただ、こうしている事しかできなかった。悔しい。苦しい。どうすればいいのか分からない。

「連、大丈夫かよ？ってかもう掃除始まってんぞ！」

急に声をかけられた連は驚く。声をかけてきたのは、準矢(じゅんや)だった。

「・・・何ビックリしてんだよ？いいからほら、早くしろよ！」

そう言って箒を差し出され、連は。

「ありがとう・・・」

と小さく言って受け取る。そんな連に準矢は。

「お前・・・いつも思うんだけど、本っ当に元気ねーなァ！少しは元気出せよ！・・・もっと自分に自身を持つっつーかさァ・・・」

・・・自分に自身を、持つ？

「頭もイイんだしさ、お前。また5番以内なんだろ？テストの順位。

すげーよな。」
準矢はそれだけ言って去っていった。連は立ち上がり、箒で床を掃く。他のみんなは遊んでいて、掃除などしているのは連ぐらいしかいなかった。連は注意しようと思ったが、言っても聞いてくれないだろうと思って何も言わなかった。
―オレが言っても、何も変わらない。オレは、何も変えられない。―

「どうしよう・・・」
藍璃はやはりまだ悩んでいた。どうすればいいのか。・・・やはり咲斗に何か言った方がいいのか？でも、その何かが、分からない・・・！・・・その瞬間(しゅんかん)、誰かに肩を叩かれた。
「藍璃・・・」
この、声は。
「え・・・」
声をかけてきたのは。咲斗だった。藍璃は後ずさり・・・ただ咲斗を呆然と見つめる。
「あの、さ・・・オレ、鈴から聞いたんだけど・・・」
鈴から、聞いた？あたしが咲斗(あなた)のことをスキってこと？やっぱり聞いたんだ？
咲斗は藍璃から少し視線をそらし、
「・・・あのさ。もし、そのことがウソじゃないなら・・・明日の昼休み、音楽室の前に来てくんないか？」
と小声で言った。
「え・・・？」
・・・え？・・・ちょっとまってよ。どうして。何で音楽室の前なの？連と約束した音楽室。
「ちょっとまって・・・音楽室は・・・」
藍璃が困ったように言うと。
「お願いだ・・・！明日音楽室に、来てくれ！・・・オレ、待って

るから。」
咲斗は藍璃の言葉を聞かずにそれだけ言って去っていった。『待ってるから。』
「え・・・どうしよう・・・」
連も、来るのに。音楽室へ。明日は断っておかないと・・・！連に。

「清掃終了時刻になりました。掃除用具を片付けて、教室に戻ってください。」
そして。清掃終了時刻の放送がながれた。

【第5話：すれちがい】

「さよならー！」
正門にいる先生などにあいさつし、学校をでる。藍璃(あいり)は少し速く歩く。藍璃はいつも夏実(なつみ)と帰っている。でも夏実とは部活がちがうのでどちらかがどちらかを待ち、そして2人で帰っていた。でも今は・・・咲斗(さきと)のことで少し気まづくなってしまっている。だから。今日は一人で帰ることにした。なんとなくさみしいが、だからといって2人で帰ろうとは思わなかった。
・・・空は少し青くて、暗い。月がもう見えはじめている。藍璃は連を思い出す。ピアノ。流れる、完璧な音に引き込まれる。力強い・・・やっぱり好きになってしまった。ピアノもそうだけど・・・それよりも、連(れん)を。好きになってしまった。

咲斗は言った。
『明日、来てくんない？』
昼休み？連は？音楽室で約束したんだよ。
音楽室で待ってるって言ったのはあたし。その約束を自分から破るなんて、できない。でも、咲斗に呼ばれた。多分、あたしが咲斗のことを好きだって知って、その返事をするためだと思う。でも、なんで音楽室なの？連が、来るのに。
・・・でも、行くしかない。悪いけど、もう好きじゃないんだ、と伝えなければならない。それと。連には、明日音楽室には来ないで、と言わなければいけない。聞かれたくない。あたしが咲斗のことを好きだった、なんて。連にだけは、聞かれたくない・・・。
藍璃は唇を噛み締め、空を見上げた。空はさっきよりも少し暗くなっていて、月もハッキリと見えるくらいになっていた。

藍璃は・・・咲斗のことが好きなのか・・・？
連はずっとそのことを考えていた。部活のときも、今も。なぜこんなにも藍璃のことで悩むのか、自分でも分からなかった。今まで、こんな強い感情を持ったことはなかった。どうすればいいのか分からない。藍璃のことを考えていると、胸が苦しくなって、叫びたくなって、泣きたくなった。自分を抑えきれなかった。もう、何が何なのか分からなくて、ただ・・・ただ、苦しくなるだけだった。何なんだよ・・・
連はハッとした。
「オレ、藍璃のことがスキなんだ・・・！」
好き。これが、この感情が、好きってことだったんだ。やっと、気づいた・・・でも。だから、何だというのか。好きだからなんだ？どうしたいのか分からない。この気持ちを、伝える？でも伝えてどうするのか？だって藍璃は連のことが好きなんだから、どうしようもない。・・・でも、でも。咲斗にとられるなんて、イヤだ。絶対に。
でも。でも・・・
オレには何もできない。
この気持ちを伝えることも、藍璃を振り向かせることもできない。
連も、唇を噛み締めた。

―伝えたい。伝えられない。伝わらない。苦しい。―

2人とも、どうすればいいのか分からなくなっていた。想いを伝えたい、だけど伝えられない。本当に苦しんでいた。
「どうして、うまくいかないの・・・？」

【第6話：小さなウソ】

次の日。

藍璃はいつもより早く学校へ行き、連を待っていた。
連はいつも学校に早く来る。それを待っていた。

しばらく席に座って待っていると、廊下でキュッ、キュッ・・・という上履きの音がする。
藍璃は立ち上がり、教室の入り口を見つめる。
ガラッ・・・
連が来た。藍璃は連に走り寄る。連は「？」と首をかしげる。
「あのさ、連。」
藍璃は連に話しかける。
「何・・・？」
連がそう聞くと藍璃は、
「え？あ・・・えっとぉ・・・なんと言うか・・・」
と戸惑う。少しして、
「えっと、悪いんだけど、今日は音楽室に来なくていいから・・・っていうか・・・あたし行けないから。・・・ごめん。」
と言った。連は「え？」といって藍璃を見る。
「え・・・何で？」
連は困ったように聞く。そう聞かれてに藍璃も困ってしまう。まさか、
『咲斗に音楽室に来てって言われたから。連に話してる内容を聞かれたくないし。エヘッ☆』
・・・なんて言えないし。
藍璃は困って、「えっとー、だからー・・・そのー・・・」とブツブツ言う。そして、

「いや。今日吹奏楽部で音楽室使うらしいから。だからー・・・使えないんだ。音楽室。」
というウソをついた。それを聞いて連は「ふーん？」と言った。そして、
「わかった。じゃあ明日？」
と言った。
「え、うん。あしたは行ける。ごめんねー・・・」
と藍璃は笑ってごまかし、自分の席に戻る。そして、
・・・なっ何とかごまかしたぁあ～！！ふぅ。・・・いや。バレないかな？いやいやいや・・・大丈夫だよね！連はいつも教室で本読んでるし。うん。大丈夫！ふぅ。
と心の中でほっとしていた。

連は今日は音楽室に行けないので、少し落ち込んでいた。・・・藍璃と少しでも話をしたかったなぁ。ピアノも弾けないなんて。はぁ・・・残念。でも明日行けるから、いっか。
と教科書をかばんから出したり、したくをはじめた。

藍璃はボーっと天井を見上げる。・・・そーいや咲斗は何を言うつもりなんだろう。ごめん！とかかな。いや、でもこっちは告白もしてないのに勝手にフラれるとか、何か悔しい。今は連のことが好きで、咲斗のことはもう好きじゃないんだし。うぅー・・・。
頭がモヤモヤとする。

藍璃がその後の授業に全く集中できなかったことは、言うまでもない・・・。

【第7話：目撃】

藍璃(あいり)はあまり気が進まないのだが音楽室へと足を運ぶ。
はぁ。何の話なんだろぅ？
藍璃は咲斗(さきと)に呼ばれたため音楽室へ行くのだ。本当は連(れん)とピアノの練習をしたいんだけどなー、と思いながら角を2回曲がり音楽室前の廊下へ。すると咲斗がもうすでに音楽室のドアの前にいた。
「あ、ゴメン。もうきてたんだ・・・」
藍璃がそう言うと、
「大丈夫。・・・話しにくいから、中入ろう？」
といって音楽室のドアを開け、藍璃に中に入るよう促す。藍璃は頷いて音楽室に入る。咲斗も続いて中に入り、ドアを閉める。そしてドアの鍵も、咲斗が持っていた鍵で閉めた。藍璃はそれに気づかず、壁側の一番端のイスに座る。
「・・・で、話ってさー・・・やっぱり、アレ？あたしが、・・・」
藍璃が言葉を詰まらせると、咲斗も藍璃の近くのイスに座り、
「うん、そう・・・んで音楽室来るってコトは、オレのことホントに好きってことなんだよな？藍璃？」
名前を呼ばれ、少し驚くする藍璃。それにそんなにハッキリと言われると、何か恥ずかしい。藍璃はちょっと赤くなる。
「ぅん。前までは、好きだったけど・・・今はもう、」
と藍璃が言いかけると、
「え？」
咲斗は思いもしなかった答えに驚く。
「・・・や、前まではあたし咲斗のこと好きだったよ。でも今は他に好きな人ができたから」
と言いかけると、咲斗が立ち上がり藍璃の目の前まで歩いてくる。
藍璃は驚いて咲斗を見上げる。
「え、オレじゃないの？・・・どーゆーこと？」

咲斗は、少し声をあらげるた。
・・・咲斗は、やっぱり近くで見るとカッコよくてドキっとしてしまう。藍璃の目は咲斗に釘付けになる。
やっぱり、あたしが好きになった人だ。・・・でも、何か違う。咲斗は、ただドキドキするだけ。
でも、連は？・・・連は、話してると楽しくて、一緒にいたくて・・・すごく幸せな気持ちになる。
・・・連の方ががいい。どうして同じ男の子なのにこんなに違うんだろう？
藍璃が言葉を発せられずにいると、藍璃の言ったことを完全に理解した咲斗がまた言う。
「じゃあ、藍璃はそいつが好きで、オレはもう好きじゃないてこと？」
咲斗は目を細めて悲しそうな顔をする。藍璃はまたもドキっとしてしまう。もう好きじゃないはずなのに。
「・・・うん、ごめん。あたしから好きて言っておいて・・・ゴメン」
藍璃が申し訳なさそうにうつむいて言った。すると咲斗は。
「ゴメン？・・・何だそれ。ふざけんなよ。オレは、藍璃のことずっと前から好きなんだけど。」
「え・・・？」
「最近、毎日昼休みにピアノ弾いてるのいつもきいてたよ。・・・誰かさんと練習してるところだったから、話しかけれなかったんだけどな。」
あ、あれ？どーいうこと？あたしのこと断るために呼んだんじゃないの？あれ？？じゃあ、あたしと咲斗は両思いだったって、こと？それに連とピアノ弾いてるの、知って・・・？
藍璃が戸惑っていると、咲斗が藍璃に近付く。そして、咲斗は藍璃の左腕をつかんだ。
「え・・・何」

藍璃は驚いて立ち上がる。その勢いで、イスが大きな音を立てて倒れる。だが咲斗はそれに驚くこともなく、藍璃のもう片方の腕もつかむ。
「ちょ、放して・・・」
咲斗は、真顔だった。藍璃が咲斗の手を振り払おうとするが、無駄な抵抗だった。自分よりも背の高い男子に、力でかなうはずもない。・・・こわい。
「放してよ・・・っ何すんの！？」
涙目で必死にもがく藍璃は震えながらそう言うが、咲斗が聞くはずもなく・・・
咲斗は藍璃をそのまま壁に押し付けた。
「キスに決まってんだろ・・・オレ、藍璃がホントに好きなんだ。もう止められない」
咲斗はそう言ってゆっくりと藍璃に顔を近づけていく。・・・藍璃はやっと咲斗がしようとしていることを理解した。その間も少しずつ咲斗の顔が近づいてくる。どうすることもできずに藍璃はただ咲斗を見つめた。
が、次の瞬間。
ガッ！！
「っい・・・！！」
鈍い音と共に咲斗のうめき声。藍璃が、咲斗の脛（すね）を思いっきり蹴ったのだ。脛の痛みにより、咲斗が藍璃の腕をつかんでいた手の力が緩む。その隙に藍璃は咲斗の手を振りほどき、ドアまで走る。走って・・・ドアの取っ手に手をかけ、思いっきりドアを開けた・・・！
「・・・あれ？」
ドアを開けたはず、なのに。藍璃は今おこったことがまだよく分からない。
何で、ドアが開かないの？
藍璃は混乱する。何度も強くドアを横にずらそうとするが、ドアは揺れるだけでビクともしない。

・・・開かない、開かない。どうしてっ・・・・！？
「・・・あ、開かねぇぞそのドア。」
咲斗が藍璃に蹴られた脛をさすりながら歩いてきて、藍璃にそう言った。
「な、んで？」
藍璃は意味分かんない、という顔で聞く。
「だって、オレが内側から鍵かけたから。ホラ」
そう言って、咲斗は音楽室(このドア)のドアの鍵を藍璃に見せた。
内側から、鍵を、かけた？
・・・そういえば、この音楽室のドア、内側からも外側からも鍵かけれるやつだ・・・
って言うか、何で咲斗はそこまでするんだ・・・？
藍璃が呆然としていると、また咲斗が藍璃の腕をつかんだ。
「咲斗、放して。」
だが藍璃はさっきのように抵抗はせず、でも震えた声で静かにそう言った。
咲斗は抵抗しないのに少し驚くが、すぐに真顔に戻る。
「嫌だ、って言ったら？」
それでも藍璃は抵抗したりせず、唇を噛み締める。
だって、どうせこの力にはかなわないもん。
・・・っていうか、どうすればいいんだろう。
「・・・そんなに、あたしにキスしたいの？」
藍璃の言葉に、咲斗はピクリとする。でも何も答えず、ドアの横の壁に藍璃を押し付ける。
「・・・そうなんだ。」
藍璃は、静かに咲斗を見上げる。
「ドア、開けてくれないよね？」
藍璃が分かってるけど、という言い方で咲斗にそう聞く。するとやはり咲斗は「開けない」と呟くように言う。
「・・・あっそ。じゃあさ、交換条件してくれない？」

藍璃の意味不明な言葉に、咲斗は「え？」言う。
「交換条件。あたしにキスしたいなら、していいよ。でもその代わり咲斗は、音楽室のドア（このドア）をすぐに開ける。これでどう？」
咲斗は藍璃がこんなことを言うなんて予想もしてなくて驚く。
交換、条件？それにキスしていい、なんて言うとは。好きなやついるんだろ？いいのかよ。
・・・オレが言うのもアレだけど。
「分かった。オレはいいぜ？・・・お前が良いならな。」
咲斗はその交換条件を了解した。

「はぁ・・・」
連は図書室から出て、教室への道を戻る。
階段を、上がる。
この上は、音楽室・・・
そーいえば藍璃が朝、音楽室は吹奏楽部で使ってるから今日は無理って言ってたけど・・・オレ、実は吹奏楽部員なんだよね。
でも音楽室を使う、なんてことこと聞いてないし。何で藍璃はウソついたんだ？
連は、ゆっくりと階段をのぼる。
気になるから、音楽室ちょっとのぞいていこう。
そして、連は音楽室の前へ。
するとそこには。
「藍璃・・・？」
連の手からは、本が音をたてて落ちた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0538f/

音楽室で、待ってる。

2010年10月14日14時22分発行